

## 第四章 古墳時代

### 第一節 はじめに

古墳時代という日本考古学独自の時代区分は、それ以前の時代が土器の特徴によって時代を分けているのにくらべて、死者を埋葬した古墳によって代表させている。その大きな理由の一つは、この時代における墓制が、これまでの日本のどの時代にもみられないほど、社会全体が墳墓の造営にきわめて大きなエネルギーを費していることによるであろう。それは四〇〇メートルをこえる巨大な古墳から、一〇メートル程度の古墳まで、その質量の差は著しいが、いずれもその築成に意をつくしている。また古墳は南は鹿児島県から北は青森県まで、山間部や小さな島々まで、いたるところに形成されている。

すなわち古墳時代はこのようなおびただしい古墳が造られた現象を、この時代の特徴をもっとも良く示すものと考え、現在では定着した呼びかたとなっている。

古墳時代の研究は江戸時代の中頃以降に、古墳出土品などを扱ってしだいにその認識を深めるようになってきた。また宇都宮の商家に生れた蒲生君平は、尊王思想の立場から陵墓などを実際に踏査して、古墳の形式変遷を示

した。この考えはほぼ現在の考えと矛盾しないものであり、「前方後円墳」の用語も君平の発案といわれている。明治以降は他の諸分野の学問と同じように、考古学においても西洋の考古学がシーボルトなどによって紹介され、近代的な学問としての出発を行った時期である。ゴースト<sup>②</sup>などによる古墳研究はすぐれたものを残しているが、日本人による研究もしだいに活発になり、坪井正五郎<sup>③</sup>などを代表とする、いくつかの調査・研究が行われた。

大正時代には喜田貞吉をはじめとして、古墳の年代論などいくつかの活発な論争が展開された。また大正五年に浜田耕作<sup>④</sup>は、欧米における発達した型式学的方法や層位学的な研究方法を紹介し、これらの実践による研究成果が発表され、学界に大きな影響をあたえた。大正末年には邪馬台国<sup>⑤</sup>の所在に関して、考古学からも積極的な発言が行われた。これらは主として古墳の副葬品として重要な位置を占めている銅鏡の型式学の問題や、その分布状況を中心としたものであった。

戦後は発掘が広く実施されるようになって、重要な資料が急速に蓄積されつつある。それは特に昭和三〇年代後半頃から、加速度的に増大する開発に伴う調査によって一層顕著になっている。これらを受けて古墳の変遷観はさらに精細になってきた。特に土師器や須恵器の編年研究は著しく進展し、これまでの鏡の年代研究以上に有効性を発揮するようになってきた。また古墳の調査もこれまでの内部構造や遺物の研究のみではなく、墳丘やその周囲の築成の実態についても研究が行われるようになっていく。また戦後の大きな特色として、集落や生産遺跡の調査が増大し、それらの成果が古墳時代の理解に大きな役割を果たすようになったことであろう。

古墳時代はいつごろはじまって、その終りがいつであるかという問題は、古墳とはどのようなものであるかという認識と、実年代の問題が解決される必要がある。前者については、その現象を規定する考えかたがいくつか

提出されてはいるが、なお古墳時代におこなわれた、すべての「墓」を包括する概念が設定され得ていない状況である。また後者についても考古学資料のもっている性質から、実年代を与えることがきわめて困難なことによって、その一点を限定することができない。しかしながら、弥生時代以来営まれてきた共同墓地のなから、特定の個人あるいは特定の集団の墓のみが、他の墳墓を圧して立地・墳丘・内部構造・副葬品などにおいて、きわめて優位をもって出現することが知られている。しかもこの現象は西日本の瀬戸内海沿岸部において、ほぼ同じころに始まったと考えられている。そしてこれらの古墳の多くは、前方後円墳や前方後方墳といった外形を示している。現状ではこのような現象のあらわれる時期をもって、古墳時代の始まりと考えられている。

古墳時代の終末については、従来『日本書紀』に規定されている「喪葬制」<sup>⑥</sup>をもって画する考え方が行われていたが、その公布や規制力の実態について疑問が呈されるようになってきている。考古学的事実からは喪葬制で規定された墳墓そのものも、古墳と考えざるを得ないし、この時期における実年代の知られる天皇陵などから見ても、その実態は古墳としての特徴を残している。たとえば天武陵は墳丘の裾を八角状にめぐる列石があり、段築を有している。また、南面する切石積の横穴式石室のなかに、木棺が安置されていたことが知られている。このような八角形を呈する外形は、最近調査された奈良県中尾山古墳で確認されている。この古墳は文武天皇陵<sup>⑦</sup>の可能性が高い古墳と考えられ、内部構造は横穴式石棺で、おそらく火葬骨を埋置したものと推定される構造であった。中尾山古墳で推定される火葬の採用は、葬制観念のうえで大きな変革であり、封土や内部構造あるいは副葬品にも、大きな影響をあたえている。ほぼこのころを古墳時代の終りと考えてよいであろう。また各地に形成された群集墳においても、七世紀中葉には新しく古墳は造られなくなり、これまでの古墳に追葬するという状況である。この時期にいたって社会全体において、古墳造営へのエネルギーが鎮静した時期と考えられる。

古墳時代の期間を考えるうえで、古墳時代の終末については、さきに述べたように文献記録で確実な人物の死亡年代などから考察することも可能である。しかしその始まりのように、文献の採用が直接期待できない時期については、古墳にあらわれている現象、すなわち立地・墳形・内部構造・副葬品などの、相対的研究によって類推する方法がとられる。特に銅鏡による年代研究は、古墳時代の始まりについて多くの提言をしてきた。また最近では土師器による編年観<sup>⑨</sup>が整えられ、古墳時代の始まりを三世紀の終りごろから、おそくとも四世紀初めごろの時点と考えるようになっていく。

## 第二節 墳丘の形といろいろな埋葬

土を盛り上げたり石を積んで一定の高さに築いた墳丘の形には、いろいろな種類のものが知られている。形をわけている基準は、古墳を上からみた平面の姿によっている。日本の古墳の形は種類が多く、最も数の多いのは円墳で、ついで方墳・前方後円墳・前方後方墳・帆立貝式古墳<sup>⑩</sup>の順序であろう。そのほか、上円下方墳・双円墳・双方中円墳・双方中方墳・双方墳・八角墳などがあるが、いずれも多くて一〇基程度しか知られていない、むしろ特殊な古墳の形である。

前方後円墳は日本最大の規模をもつ大山（伝仁徳陵）古墳をはじめ、大古墳の形に採用されている。前方後円墳は埋葬の中心である円丘部に、長方形の前方部が付設されたような形をしている。古墳時代の前期から後期まで、ほとんどの地域で墳丘の規模や埋葬施設、副葬品の内容が最も優れた状態を示している。前方後円墳が各地域における、支配者の古墳であるといわれる理由であろう。

但馬地方における前方後円墳は第四節で述べるが、現状で一五基が知られているにすぎない。この数は同じ兵

庫島の播磨地方とくらべても著しく少なく、また最大の古墳は和田山町の池田古墳で、墳丘の長さ一二六メートル程度である。

前方後方墳は埋葬の主となる部分が方形を示すもので、方形の一边に前方部が延びる形態である。全国で約一〇〇基程度知られているが、近畿・中国・四国・関東に多く分布する。このかたちも最古式の古墳と考えられ、岡山県湯追車塚古墳<sup>⑩</sup>などが発見されてから、古墳時代を通じてみられる墳形であることが確められている。但馬地方ではこの形の古墳は知られていないが、山陰地方、特に出雲においては多く採用された墳形である。

前方後円墳や前方後方墳の形も、時期によって少しづつ変化している。それは前方部の大きく高くなることによっている。前期の古墳としては前方部が低く長い奈良県茶臼山古墳<sup>⑪</sup>、大阪府紫金山古墳<sup>⑫</sup>などが代表例である。中期古墳としては誉田山古墳<sup>⑬</sup>(伝応神陵)・大山古墳<sup>⑭</sup>のように、後円部の径と前方部の幅・高さがほぼ等しくなり、墳丘の規模も大形となっている。後期では奈良県別所大塚<sup>⑮</sup>や和田山町小丸山古墳<sup>⑯</sup>のように前方部の幅・高さが後円部を越えるものとなる。また古墳の規模も著しく小形化する。

円墳、方墳は平面形がそれぞれ円・方形を示すものである。

この円・方墳は古墳時代の初期から終末まで造られた、最も普遍的な形である。日本の古墳では円墳が最も多く、日高町においてもいまのところ、すべての古墳が円墳と考えられている。埼玉県埼玉古墳群<sup>⑰</sup>中の丸墓山古墳<sup>⑱</sup>は、径一〇〇メートルの日本最大の円墳である。但馬地方においては、和田山町城の山古墳<sup>⑲</sup>の三五メートル、出石町茶臼山古墳<sup>⑳</sup>の四〇メートル程度が最大級の円墳である。さきに挙げた但馬の二古墳が、その地における最も有力な古墳であるのに比べて、大山古墳の周辺部にみられる円墳などは、主墳に従属する陪塚的な位置づけがなされていて、群内の最有力の古墳とは考えられない状況である。

方形墳も円墳と同様の位置づけがされる形であるが、後期古墳すなわち六世紀の後半の天皇陵級の古墳と呼ばれる支配者の墳墓は、前方後円墳の築造をやめて方墳を採用している。但馬地域でも最近発掘された村岡町長者ケ平<sup>がなる</sup>二号墳は方形であることが知られた。

帆立貝式古墳と呼ばれる古墳の形は、前方部が後円部の径の $\frac{1}{2}$ 以下のものを呼んでいる。帆立貝の形に似ているところから名づけられたものであるが、円墳に造り出しが付設されたものと混同される場合も多い。但馬においては豊岡市立石一〇五号墳<sup>④</sup>の発掘調査が実施され、確実な帆立貝式古墳の実例を呈示している。

その他にいくつかの形の古墳があるが、いずれも例数が少ないもので、発掘調査によって確認された例は極めて少ない。

古墳時代の埋葬施設に対する考え方を大別して、竪穴式石室と横穴式石室に分類することができる。またこまかく棺に使用された材質によって、木棺・石棺・土器棺などと分類することも可能である。

前期古墳の代表的な埋葬として知られる竪穴式石室は、墳丘上に墓穴<sup>はかあな</sup>を掘り、板石を積み上げて長さ六く七メートル、高さ一メートルの長方形の空間をつくり、そのなかに木棺を安置する方法である。石室をさらに粘土で密閉することや、排水溝を設けるなど入念に造られている。奈良県桜井茶白山古墳、大阪府弁天山CI号墳などはその代表例である。竪穴式石室は古墳時代を通じて多用されたが、中期以降では代表的古墳の埋葬には採用されなくなる。

日高町においても楯縫古墳群や訓原三号墳・岩倉古墳群などの、古墳時代後期の群集墳のなかに認められるが、それらは長さがせいぜい二く三メートル程度の小規模なものである。また石室の規模だけではなく、石室床面なども砂利を置く程度で、ほとんど何らの施設をもたない。中期後半から後期初めごろの築造と考えられる馬

場ヶ先古墳の竪穴式石室は、河原石積みの石室で、天井石やウラ込めの手法などに古い様相を残している。

前期後葉になると竪穴式石室の石積みを省略して、粘土で棺を覆うだけの粘土槨が採用され始める。大阪府和泉黄金塚古墳の中央および東にあった棺は、割竹形木棺と呼ばれる木棺を、粘土で覆った構造を示している。この葬法は各地における首長墓に採用されているが、但馬地方においてはあまり類例がない。詳細は不明であるが、城崎町小見塚古墳が粘土槨であつたらしい例と、和田山町城の山古墳が、粘土槨の退化形式とみることができ、程度である。

中期初頭になって、大古墳に採用された葬法は長持形石棺である。六枚の加工した板石を組合せ、側石・蓋石・底石などには、前後左右に長く突出した縄掛突起をつくり出したものである。明治五年（一八七二）に日本最大の古墳である、大山古墳前方部から出土したものが著名である。大山古墳・奈良県宮山古墳・大阪府津堂城山古墳などは、竪穴式石室で石棺を覆っているが、やや新しい京都府久津川車塚古墳の場合は、石棺を直葬しその前後に小石室を造るのみである。

この長持形石棺は、その地域における代表的な古墳の埋葬棺であることが知られている。但馬地方でも一例その遺存がある。出石町に所在する石棺は、出土古墳が不明であるため充分にその実態を検討できないが、この地域に有力な古墳のあつたことを推定させる。

以上のような、各地における有力な古墳の埋葬主体として採用された棺に比して、弥生時代以来の共同墓地で使われた棺に組合式木棺がある。木棺は人体の納まる程度の大きさに板材を組合せて箱形に造つたもので、直接土中に埋葬する。木棺そのものは古墳時代を通じて使われたが、木棺を直接土に納める木棺直葬と呼ばれる葬法は、土壙墓と呼ばれる、木棺を使わないで人体を直接土中に納める葬法とともに、最も簡単な埋葬方法として多

く行われた。

横穴式石室は朝鮮半島を経て、大陸の墓制が我国に伝えられたもので、五世紀初めごろには北九州に伝わり、その後畿内周辺部に採用されたものである。その後たちまちのうちに古墳時代後期の埋葬施設として広まった。最古式の畿内の石室は、大阪府塔塚古墳、同芝山古墳や菅田山古墳西側の藤ノ森古墳などが知られている。但馬地方における横穴式石室の採用は、その基本的な調査例がきわめて少ないため充分でないが、村岡町八幡山六号墳や、豊岡市見手山一号墳などが、早い例かと思われる。特に見手山一号墳は、全長三五メートルの前方後円墳であることが注目される。その時期は六世紀初め頃であろう。日高町においても横穴式石室は、多くの古墳に採用されている。やや古墳群の状況が判明する岩倉古墳群では、埋葬主体の知られる一四基の古墳のうち、一基の堅穴式石室を除いて他はすべて横穴式石室である。横穴式石室は遺骸をおさめる玄室げんしつと、その一方に羨道せんどうと呼ばれる通路を接続したものである(第89図)。石室は奈良県石舞台古墳いしうたいこふみなどのように、天井石の最大のもの約七メートルという巨大な石で構成されたものもみられる。室内には木棺や組合式石棺、あるいは後にのべる家形石棺などが安置されていることが多い。

家形石棺は、蓋の形が家の屋根に似ることから名づけられたものであるが、その関連については明らかでない。主として後期に発したもので、蓋に六個の縄掛突起をもつ典型的なものや、突起が省略された退化形式のものなどがある。身は箱形をしていて、組合式のものあわせしと刳抜式くさくしがある。但馬においても、家形石棺は何例か知られている。城崎町二見谷古墳群ふたみやこふみぐんは一号墳に刳抜式、四号墳に組合式の石棺が置かれていた。また浜坂町二方古墳や、浜坂町国民宿舎敷地内にあるものなどはその例である。二見谷古墳は六世紀後半ごろに築造され、二方古墳もほぼ同じころの古墳と考えられる。



箱式石棺と呼ばれる埋葬は、弥生時代以来から行われていて、古墳時代を通じて見られる葬法である。長さ二メートル、幅〇・五メートル程度の、一人を埋葬するに足りる空間を、数枚の板石を組んでつくったものである。広さ、石の加工の程度など若干の違いがみられるが、地域的にも広く行われた埋葬方法である。箱式石棺は概して遺物の副葬が少なく、その年代を適確に想定することが困難な場合が多い。日高町でもいくつかの実例があるが、羽根山古墳はその典型と考えられる。

埋葬に際して種々の品物を副<sup>そ</sup>える習俗は各地で認められ、また時代を問わない現象である。ただ副葬の意図やその質量によって、古墳時代は墳丘を巨大にかつ堅固につくることと相まって、きわめて意をつくした時代である。

発掘を行う場合、それが後世の乱掘をうけていないときには、埋葬当時の各種の品物を納めた状況が、そのまま発掘されることになる。その副葬された状況によって、その遺物の意味や原状を知ることができる場合もある。とはいってもその腐りやすい動・植物類などについては、ほとんど痕跡を残さない場合が多い。ふつう人骨・木棺なども消滅している。しかしながらきわめて保存に適した状況にあったもので、まれに消滅しやすいものが残る場合もある。昭和五〇年に中華人民共和国長沙の馬王堆一号墳<sup>⑧</sup>で発見され、二〇〇〇年余の時間の経過を感じさせない姿で、世界中をおどろかせた女性の埋葬はその代表例であろう。

日本でも昭和四四年に発見された栃木県七廻り鏡塚古墳<sup>⑨</sup>の例は、舟形・箱形の二つの木棺がほぼ原形を残して出土し、内部の副葬品などの保存もきわめて良好な状態であった。

副葬される遺物は時期によって変化がみられる。前期古墳は銅鏡や石製腕飾類<sup>⑩</sup>などの、宝飾的な副葬品を主体として納めているが、中・後期の古墳では金銀を使った一連の装身具の副葬が行われている。金銅製の冠帽<sup>⑪</sup>、金

銀製耳飾、金銅製帶金具、甲冑や刀剣などの武器にも金銀を使用している。これらはいずれも支配者層の副葬品を代表するもので、各地に築造された後期群集墳の大多数は、土器類数個体・刀子・鉄鏃・わずかな玉類などが副葬されるのが一般的であった。

### 第三節 村のようすと生産の発展

古墳時代の人々がどのような家に住んでいて、村のようすなどはどうであったかという疑問は、だれしも思うことである。日常の生活を行っていた家や集落からは、古墳などの出土品から考えられる以上に、くらしぶりを具体的に知ることができると思われる。しかしこの点については、集落のすべてを調査した例が少ないため案外とわかっていない。しかし最近では集落の調査に多くの人の関心が集まり、少しづつであるが集落の調査が加わってきた。それによると、低湿地をひかえた自然堤防上や、沖積微高地にある集落が知られている。これは弥生時代に引きつづいて農耕地拡大のために、沖積地への前進にともなったものと考えられる。

昭和五二年度に調査した三田市末西五四地点<sup>⑧</sup>で、古墳時代後期の集落跡を調査した。それによると二本の溝に囲まれたなかに、五軒の竪穴住居跡と二棟の掘立柱建物跡が検出された。建替えが行われていて、ほぼ三軒の竪穴住居と、一棟の掘立柱倉庫による集落であると考えられる。おそらく最小の集団を示しているのである。

また兵庫県川島遺跡<sup>⑨</sup>では、数本の溝に囲まれてほぼ三軒の家が調査され、そのなかの一軒の竪穴住居址には、竈<sup>かまど</sup>と鉄滓<sup>てつさい</sup>がみられ、住居址が小形であることから考えて鉄を加工する作業場と考えられるものであった。このようにすでに集落のなかには、主たる農業とは別に種々の生産活動を行っていたことを知ることができる。この

ような例は最近の調査ではかなり認められるが、東京都下沼辺遺跡の埴輪製作所跡と考えられる竪穴や、加賀片山津遺跡<sup>⑧</sup>の玉造り生産の作業所跡などが著名である。

古墳時代における生産活動のうちで、もっともその基礎であったものは農業生産である。弥生時代からの発展を受けて、古墳時代でさらに著しい進展をみせたといわれている。それらは稲作を主体として、古墳文化を生み出す農産物の蓄積を実現したのである。これらは大規模な溜池を掘ったり堤を築くなど、大規模な土木・灌漑事業の発展によるものであったことは、大古墳の造営においても知ることができる。しかしながら農耕の実態を直接知ることのできる水田遺跡については、ようやくわずかの例が知られるようになってきたにすぎない。したがって以上のことは直接資料で確認される段階にはいたっていない。そのため間接的ではあるが古墳の実態や築造工程の状況から、その労働力や技術を考える方法、古墳に副葬された農具などや、集落遺跡の発掘成果から推測する研究法がとられている。

農具の種類としては鋏・鋤・両手鋏・四目鋏などの耕具と、収穫具としての鎌・杵・臼・箕などがあつた。古墳時代の農具の大きな特徴は、前代の木製品から鉄製品に材質が変化したことである。

農業生産を飛躍的に高めた鉄製農具は、前・中期古墳の副葬品にみられる大量の攻撃用武器や、農具の集積状況によって、首長層の独占的なものであつたと想定される。しかしこれらは古墳時代後期になると首長墓層の鉄器の副葬は激減するとともに、各地で爆発的に形成された群集墳のなかにも、普遍的に鉄器の副葬が認められる現象によって、横穴式石室を築造する人々にまで、鉄器の所有が広がつたと考えられる。古墳時代の鉄器生産の実態については、製鉄遺跡の確実な例が知られていない現状では不明な点が多い。また前・中期の首長墓の副葬品として、中国・朝鮮から持込まれた、鉄素材と考えられている鉄錠<sup>⑨</sup>があることから、この時期ではいまだ製

鉄の行われる段階にはいたっていなかったようである。また一方、古墳の副葬品に鍛冶道具が納められている例がある。すなわち金針や鉄鎚・鑿・砥石などの小鍛冶の必需品である。これらは中期古墳から出土する場合は、いずれもその地域における代表的な古墳であった。しかし後期中葉頃からは、群集墳内における小規模墳においても副葬される例が知られている。また岡山県六ツ塚三号墳や五号墳などのように、銑や鉄滓が埋葬にともなって置かれているような例もある。この例などは鉄器生産の主体が広がったことや、製鉄が開始されたことを示しているであろう。

土器は日常生活に多く用いられ、最も密接したものであった。そのため生活の営なまれた場所にはきわめて多量の出土がみられる。古墳時代に使われた土器は、土師器と須恵器である。土師器は弥生時代からの系統を引いた、赤褐色のやわらかい土器である。土師器については弥生時代の土器製作技術と比べてわずかの進歩をみせたとはいえ、基本的な変化を示していない。ここでは新しく大陸から我国にもたらされた、灰色のかたい土器である須恵器についてのべることにする。

須恵器の窯は窖窯とよばれ、傾斜面を利用してトンネル状に掘りぬいたり、天井部のみをすき入り粘土で築いた半地下式がある。窯は下方に焚口をもうけ燃料をもやす燃焼部、土器を置く焼成部、煙り出しからなっている。焚口の前には前庭部と呼ばれる作業場がある。さらに前庭部の前は失敗した土器や灰などの捨て場となっている。灰原（物原）と呼ばれるこの部分が分布調査の際などに発見されることが多い（第100図）。須恵器は貯蔵用の容器や葬祭関係の用途に使われたと考えられる。古墳の副葬遺物として須恵器が多量に使われていることや、大形甕の製作など、その現れであろう。須恵器は還元炎で堅く焼かれたものであるが、二次的な加熱に弱い欠点をもっている。土師器はこの須恵器の欠点を補なう煮沸用の土器として、古墳時代を通じて多く用いられた。

須恵器生産は大阪南部窯跡地帯<sup>⑤</sup>で五世紀前半頃には開始された。各地での操業は、五世紀末葉～六世紀初頭に始まったと考えられ、宮城県・愛知県・京都府・兵庫県・島根県・福岡県・佐賀県地方などでその窯跡が発見されている。日高町における宮ノ谷窯跡は、六世紀後半頃に焼かれた窯跡であろう。その他の窯跡は七世紀以降の時期であることが知られる。但馬地方では竹野町鬼神谷窯跡<sup>⑥</sup>が六世紀初めごろであることが知られ、地方における操業としては早い時期のものである。

われわれの食生活のなかで、塩を取ることがきわめて大切なことはいうまでもないことであるが、現代では塩の生産に深く注意することもないほど豊かな状況となっている。塩生産はどのような方法で行っていたかは、最近にいたるまで知られていなかった。我国の場合、岩塩などのようにそのまま利用できないところでは、海水を煮沸して結晶塩を取る方法が行われた。それは土器製塩と呼ばれる方法であった。瀬戸内海の備讃瀬戸海域<sup>⑦</sup>の海浜や島々には、なごらく「謎の土器」とされてきた粗製の土器が散布する。この土器はきわめて粗製であるが内面のみは滑らかに仕上げられていて、土器片の多くは二次的な加熱をうけて変色している。また海水中のいろいろな成分の影響によって、灰白色の付着物がみられるなどの特徴をもっている。これら土器は昭和三十一年に香川県喜兵衛島遺跡の調査によって、製塩に使用された土器であることがはじめて証明された。

土器製塩は海水の濃度を高め、それを煮沸する作業が必要である。煮沸する前に海水の濃度を高める方法として、刈りとった海藻を乾燥し、海水を何度もふりかけて水分を蒸発させ、しだいに濃い塩水を得たと考えられている。煮沸を行った炉についてはしだいに各地の調査例が増加して実態が明らかになりつつある。

## 第四節 町内の古墳

### (1) 町内の遺跡

日高町にはおびただしい数の古墳が残っていて、それらを築造した人々が近くに住んでいたことが想像される。しかし、現在のところ町内における古墳時代集落の実態については、ほとんど不明である。さきはこの時期に属する土師器の出土例を示したが、単に土器が検出されているのみで、集落を構成する住居・倉庫・井戸などの遺構は認められていない。

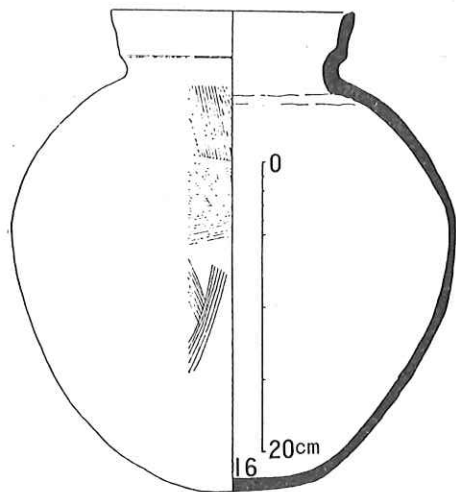
水上遺跡では古墳時代前期の土師器（第70図）がまとまった状況で出土したが、遺構との関連は不明であった。また山ノ宮遺跡・森山遺跡・菖蒲谷・南八代田遺跡なども同様である。しかし祢布ヶ森東遺跡においては、昭和四八年の町民センター建設予定地の確認調査で、幅約一・五メートル、深さ三〇センチの溝が検出され、第48図（第54図）に示した土器が含まれていた。この溝が集落のどのような位置を占めるかは不明であるが、現町民センターの南西隅付近は、城山から南東に延びる丘陵の先端部に位置すると想定され、この地に古墳時代の集落が営まれていたと考えられる。

以上のように、当時の人々の生活を最もよく示すと考えられる集落調査が不十分であることから、この時期の遺跡として町内に残されている約六〇〇基の古墳を通して、古墳時代の様子を見ることにしよう。

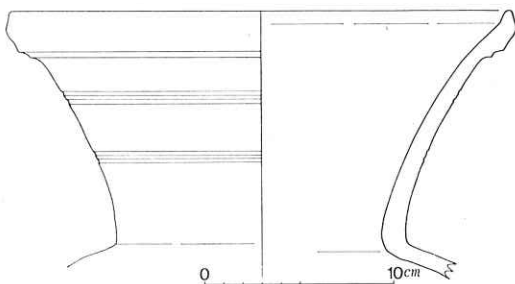
古墳は分布図および地名表に示したように、約六〇〇基の多くが知られているが、調査の実施されたものはきわめて少ない。

日高町における古墳の形は、いまのところ円墳のみで、古墳の外形を代表する前方後円墳は知られていない。

近くでは但馬文教府南方の見手山一号墳が、全長三五メートルの前方後円墳として知られているのみである。古墳群の状況も一〇〇基程度の古墳が群集するといった状況はみられず、多くて四〇基内外の円墳で構成される古墳群である。大部分が二〇基程度の古墳群で構成され、平野を見おろす丘陵上に点々とグループをなして分布している。それらの古墳群のなかには、径二〇〜三〇メートルの大規模な円墳が一〜二基含まれている。山の神・耳谷・旧進美寺参道（第一区・同第二区）・定谷・黒谷酒屋谷・菅蒲谷・猪子垣古墳群などがあげられよう。日高町の古墳群の大部分は後期古墳に属するものであるが、他地域にみられる前方後円墳や方墳などを中核とする大古墳群と異なって、各村落にともなう小規模な古墳群である。したがって墳形や、規模の差が顕著でない。しかし内部構造の規模の差や、主体部に箱式石棺・竪穴式石室を示すものなども知られているか



第81図 祢布ヶ森東遺跡出土土師器

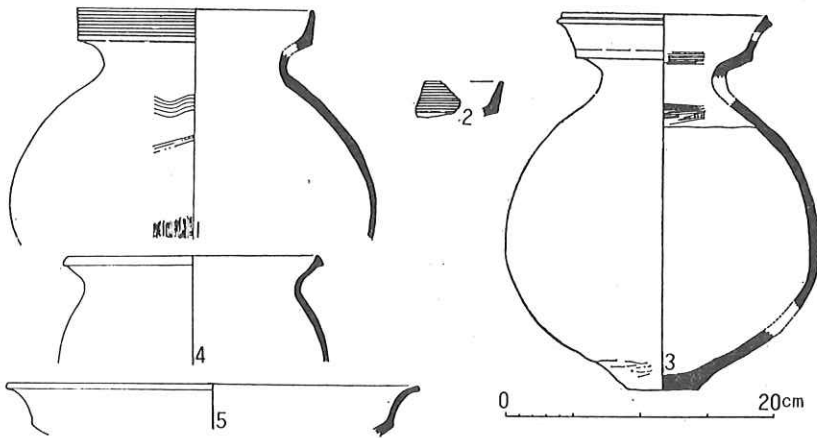


第82図 南八代田遺跡出土須恵器

ら、その内容にはなお複雑な様相があるものと考えられる。

(2) 西気小学校裏山墳墓

古墳時代のもっとも古い墳墓と考えられるのは、さきに示した豊岡市妙楽寺墳墓群、山東町柿坪墳墓群などのように、丘陵をわずかに加工して木棺や石棺を直接土中に埋葬する形態の墓制であろう。日高町においても詳細は不明であるが、西気小学校裏山で古式土師器が検出されている。この丘陵地が集落跡の存在したことが想定でき難い地形状況であることから、おそらく墳墓であった可能性が高いと思われる。西気小学校裏山の丘陵で桑園の造成を行っていた際に、箱式石棺数基と埋葬施設不明の古墳一基が発見されたといわれる。後者の資料はおそらく第107図の須恵器、土師器で、他に直刀がある。その後引き続き壺形土器や甕形土器が採集されている。古墳時代前期の集団墓と、古墳時代後期の古墳が存在していたものと考えられる。壺形土器二点と甕形土器・高坏形土器各一点が知られているが、いずれも古墳時代前期の特色を示している。第83図1は口縁部が直立し、楯状工具による擬凹線がめぐらされている。胴部は球形に近く、上部に楯描波状文、中部には粗い斜方向のハケ目、下部には細い縦のハケ目が施され



第83図 西気小学校裏山墳墓出土土師器



ている。胴部内面は横方向のヘラ削りが行われているなど、山陰地方の古式土師器に近い特徴を示している。

一括して保管されていた遺物のうち、第107図8・9の坏は前項で説明した際の古墳出土品と考えられるものである。但馬地方出土の須恵器としては古式に属し、六世紀初めころの年代を示している。他に土師器三点（第107図8・11）と、須恵器甕（第107図1）がある。甕は七世紀初めころの土器と考えられるから、いくつかの古墳の出土品が混り合っているものであろう。

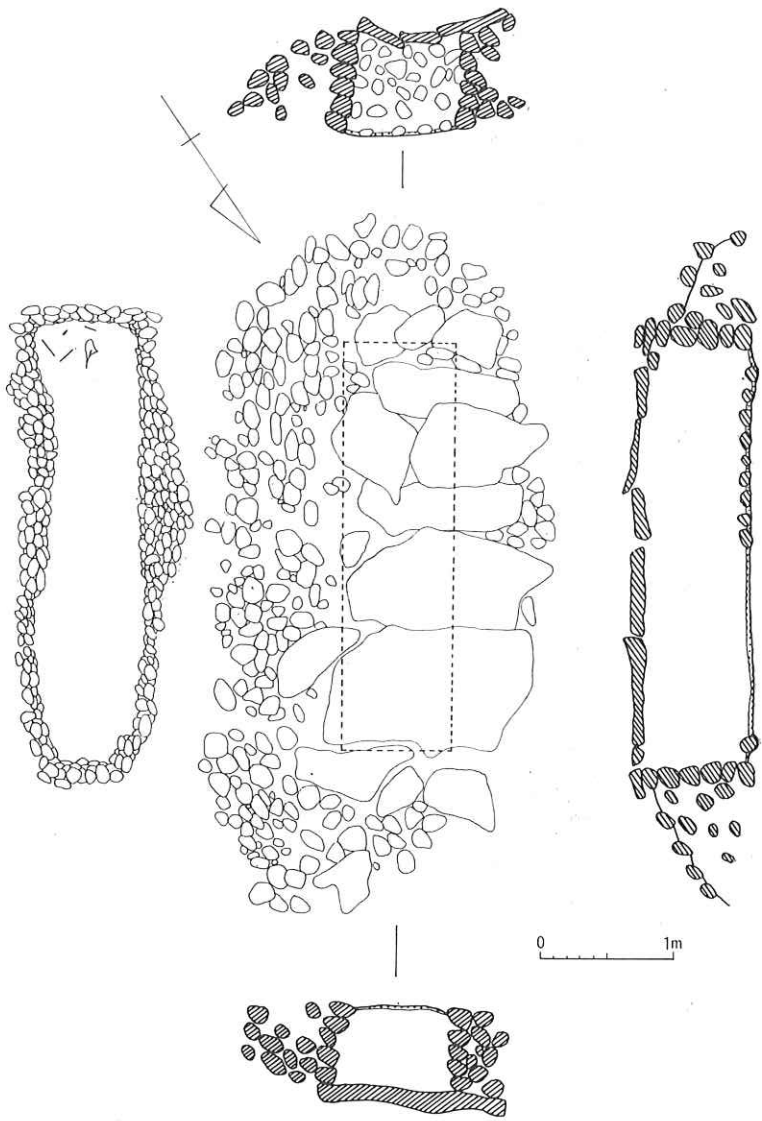
### (3) 馬場ヶ先古墳

鶴岡字馬場ヶ先に所在した古墳であったが、円山川治水工事に際し、堤防敷となって消滅した。当時の所見によると次のような古墳であったらしい。

古墳は日高町ではきわめてめずらしい円山川沿いの平野部に立地するもので、本墳の外には松岡にある十二所神社、上郷の気多神社古墳群（二基）が知られているにすぎない。

馬場ヶ先古墳の調査は昭和三一年八月に行われ、直刀一振、劍一振、鏡、玉類多数が出土したらしい。その他円筒埴輪、陶製経筒と和鏡の出土があったという。腐蝕の著しい劍と円筒埴輪片および陶製経筒片を見たにすぎないが、その際、陶製経筒片に混じって、第85図に示した二重口縁の壺形土器が含まれているのを見出した。

墳丘についてはほとんど知ることができないが、内部構造については当時の所見や移築された石室によって次のようなものであったらしい。石室は全長二・五メートル、幅一・〇五メートル、高さ六〇センチの竪穴式石室であった。天井石は北東の三枚が大形の一枚石を架構し、南西部はやや小形の石を重ねて天井を覆っていた。また石室壁面は河原石をほぼ垂直に積み上げて壁を構成し、壁面裏込めにも礫が多く入れられて積石塚状を呈していたことが窺える。



第84図 馬場ヶ先古墳石室図

石室床面は大形礫と砂利が敷かれているが、石室床面には、木棺の置台と考えられる礫が四個見い出されている。

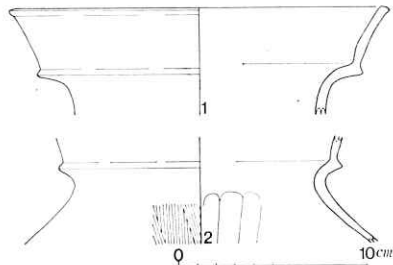
遺物は石室南西側木口部で鉄製品の出土があったが、その詳細は不明である。おそらく鉄鍔・鍔などはこの位置から出土したものであろう。鉄剣については写真によると石室中央部の北西壁に沿って出土している。

出土遺物で現存するものは、鉄剣と円筒埴輪片、土師器壺形土器である。鉄剣は錆が著しいが、全長三八・二〇センチ、身幅四・五センチある小形のものである。円筒埴輪は細片であり、また軟質のため調整の状況などが観察できない。壺形土器1・2は同一個体の可能性もあるが、いまは接合できない。1は口径約二〇センチの二重口縁の土器である。調整状況は器面の風化によって観察できない。2は外面はハケ目、内面はヘラ削りを施している。

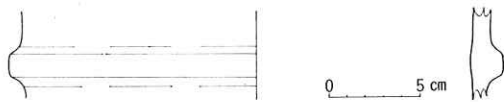
本墳はその立地および石室の状況からみて、いまのところ日高町内における高塚墳の形態を採用した最初の古墳と考えられる。しかし詳細は不明ではあるが、鍔の出土が伝えられていることから、古くとも五世紀中葉をさか上るものではないであらう。

#### (4) 羽根山古墳

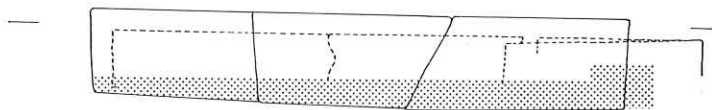
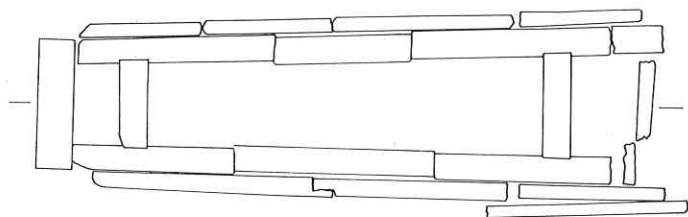
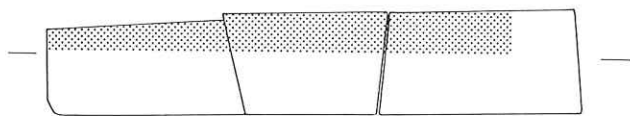
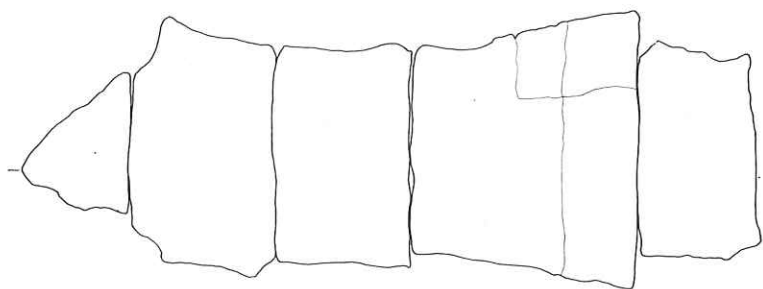
羽根山古墳の調査は昭和四一年八月五日に、日高東中学校第三棟埋立工事の土砂採取中に発見された。



第85図 馬場ヶ先古墳出土土師器



第86図 馬場ヶ先古墳出土円筒埴輪



第87図 羽根山古墳石棺図

ただちに調査が実施され、人骨二体が埋葬された箱式石棺であることが判明した。調査の所見によると、石棺は六枚の蓋石で覆われ、棺は内法<sup>うちのり</sup>り一・五四メートル、南東木口三九センチ、北西三四センチであった。石棺は板状の石を組み、側板は三、四枚の板石を立て並べ、さらに外側に四枚の薄い板石を立てる二重の構造になっている。木口は「H」字状をなし、その外側にさらに板石をたてて小石室を有している。したがって内側の石は仕切板に該当するものである。人骨は二体の埋葬があり、南東向きのものが古く、北西は後に埋葬されたもののようにある。人骨はいずれも男性で、頭蓋骨には赤色顔料が附着していた。

遺物は一六センチの刀子一本が副葬されていたのみであった。

本墳の築造時期については、出土遺物等が少なく、また箱式石棺の年代幅が大きくて、限定でき難い。その石棺の造りなどが整っていることから、古く位置づけることも可能である。羽根山古墳石棺例のように、前後に小石室を有する石棺は、和歌山県新福寺古墳例があり、片側のものとしては丹後作り山古墳<sup>⑧</sup>例が著名である。

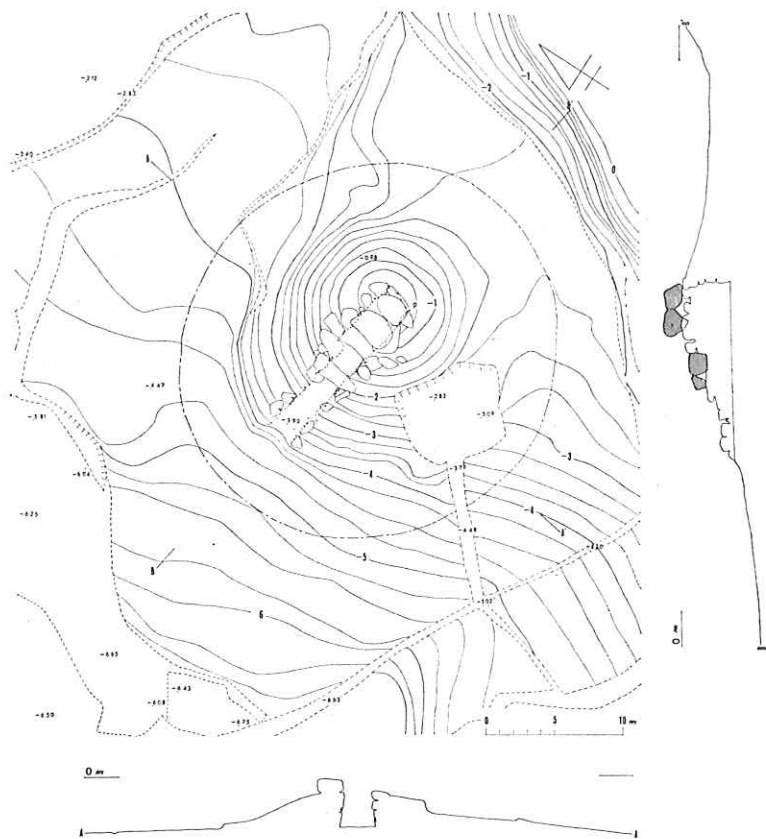
#### (5) 楯縫古墳群

楯縫古墳群については昭和三〇年に石室の実測調査が実施されている。引き続き昭和四九年にも再度測量調査が実施され、すでにその調査報告書<sup>⑨</sup>が刊行されている。引き続き昭和四九年にも再度測量調査

が実施され、すでにその調査報告書<sup>⑨</sup>が刊行されている。引き続き昭和四九年にも再度測量調査が実施され、すでにその調査報告書<sup>⑨</sup>が刊行されている。引き続き昭和四九年にも再度測量調査

り、さらに谷の奥や対岸の丘陵上に四群四〇余基の古墳が群在する。墳丘はその封土上部が大きく流失して、天井石が露出した状況となっている。しかし墳丘下部については旧状を良く残している。墳丘の発掘調査を実施していないので、規模や盛土などについては正確を期し難い。外形図によってその規模を検討すると、東西径二九メートル、南北径二七メートル程度の円墳と想定される。特に墳丘

北側は、西に下降する丘陵を切断している状況が認められる。墳丘の高さは原状を知ることができないが、石室床面から天井石上面までは約五メートルあって、本来はさらに高いものであつたろう。本墳はおよそ八度の傾斜で西方に下降する丘陵を切断して墳丘を独立させ、さらに周辺の地形を修飾・加工して形成したものと推測される。本墳の外形規模は、いまのところ町内では最も大きい古墳のうちの一つである。



第88図 栢縫古墳墳丘実測図

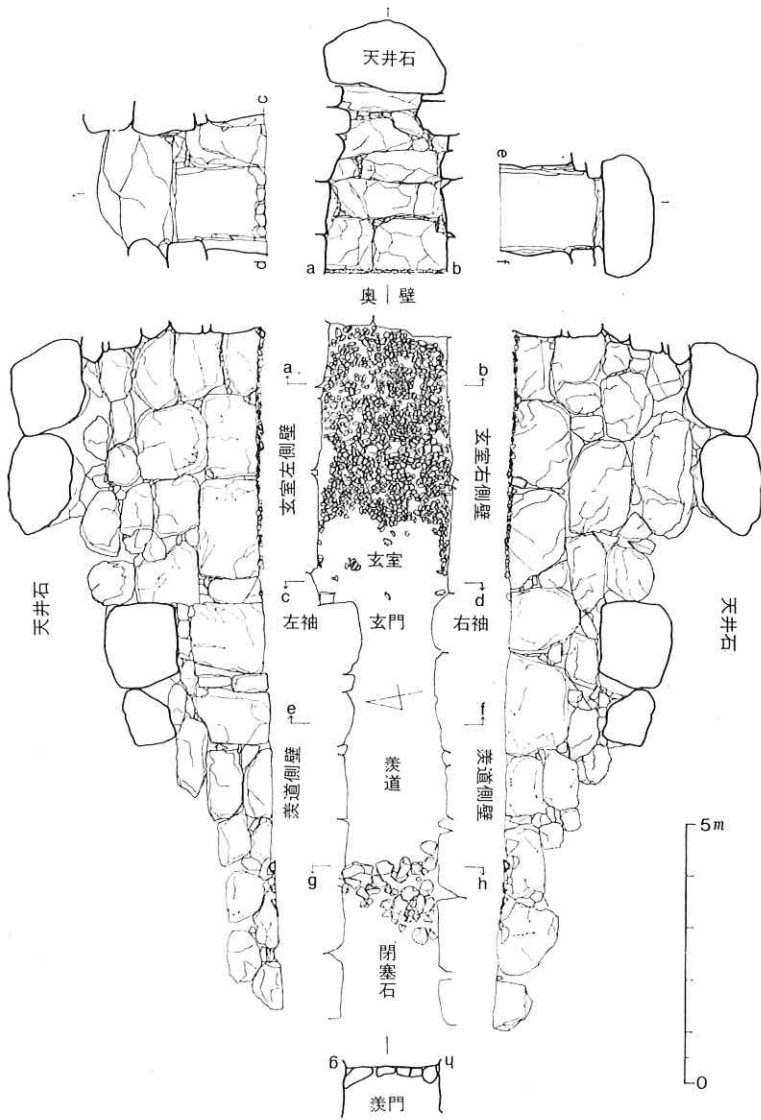
内部主体は西側に開口する横穴式石室である。調査前には玄室内に天井石が落下し、一メートル程度の土石の堆積があったが、ほぼその原状をとどめている。石室の規模は羨道西端部がやや破壊されている可能性もあるが、現状では一三メートルある。玄室の長さは五メートル、幅二・三メートルの長方形を示している。玄門部は北側が大きく、南側が小さく閉じた両袖式に属する形態である。羨道の長さは八メートル、幅は羨門に向うに従つてやや幅を増し、約一・九メートルを測る。高さは玄室で三・八メートル、羨道部で一・七メートルある。

石室の構造は奥壁が五段の石積みをなし、玄室側壁は三〜四段の石積みで構成している。石積みは最下段の石が最も大形であり、上段には小形の石を配し、それらの石の間は小角礫で埋められている。玄門部は大形の石を縦に使い、天井石とのわずかな間隙には小形石によって咬み合せている。羨道部は小形の石によってほぼ三段に積まれている。玄室天井石は三枚の石が架構されたと思われるが、現状では二枚のみが残存する。羨道部は玄門側の二枚が残るのみであるが、おそらく四枚程度の天井石が架けられたと推測される。

羨道部にはその西端から東へ約二メートルほど入った地点に、角礫によって構成された閉塞装置の下部が残存していた。

玄室床面には地山上に約一五センチ程度の、小角礫を含んだ盛土を行い、その上面に約一〇センチの川原石が全面に敷かれていた。この川原石は羨道部では認められていない。

遺物出土状況はいずれも後世の攪乱かくらんによって、埋葬時の位置をとどめたものはなかった。しかしながら玄室奥壁部付近、および羨道閉塞石付近ではまとまって検出された。奥壁部北側には直刀二振りや鉄鍔・馬具類・須恵器が出土した。また奥壁南側では鉄鍔が散乱した状況で検出され、羨道および閉塞石付近では、須恵器がいずれも元の位置から遊離した状況で出土した。



第89図 栢縫古墳石室実測図および石室各部名称図



須惠器	15
坏	25
坏高	16
壶	2
碗	1
付台	1
坏皿	1
明	2
甕	2
土師器	22
鉄	2
鍬	5
鏡	1
具	2
轡	1
直	1
鞞	1
不明	1
鉄	1

第4表 楯縫古墳出土品一覧表

出土遺物は第4表に示したものが検出された。  
 須惠器坏蓋は二点の完形品がある。第90図2は口  
 径一三・八センチ、高さ三・八センチある。天井部  
 は扁平で、口縁部との境界には凹線や稜線は全く認  
 められない。

坏身は三点の完形品があり、3は口径一二・五セ  
 ンチある。口縁部のたちあがりは低く内傾度が著し

い。  
 高坏は長脚二段透しと、短脚の二種がある。17は円筒部を細長くしほり、裾部は外方へ大きく広がる長脚二段透しで、二方向に透し穴を有する。

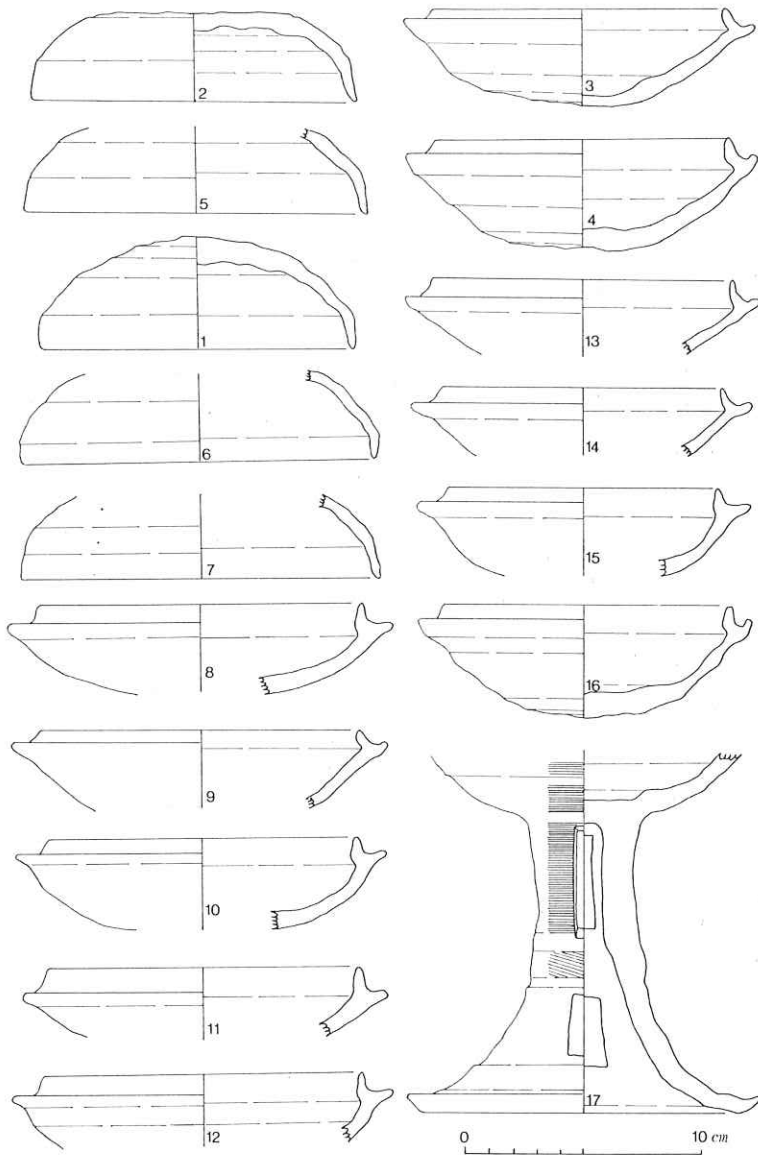
他に明らかに時期の異なる須惠器坏、灯明皿などの出土があった。

直刀1は切先部を2は基部を失っている。1は現存長七六・七センチ、2は六九・六センチある。いずれも鉄製鐔を有し、2は把木の銹着がある。

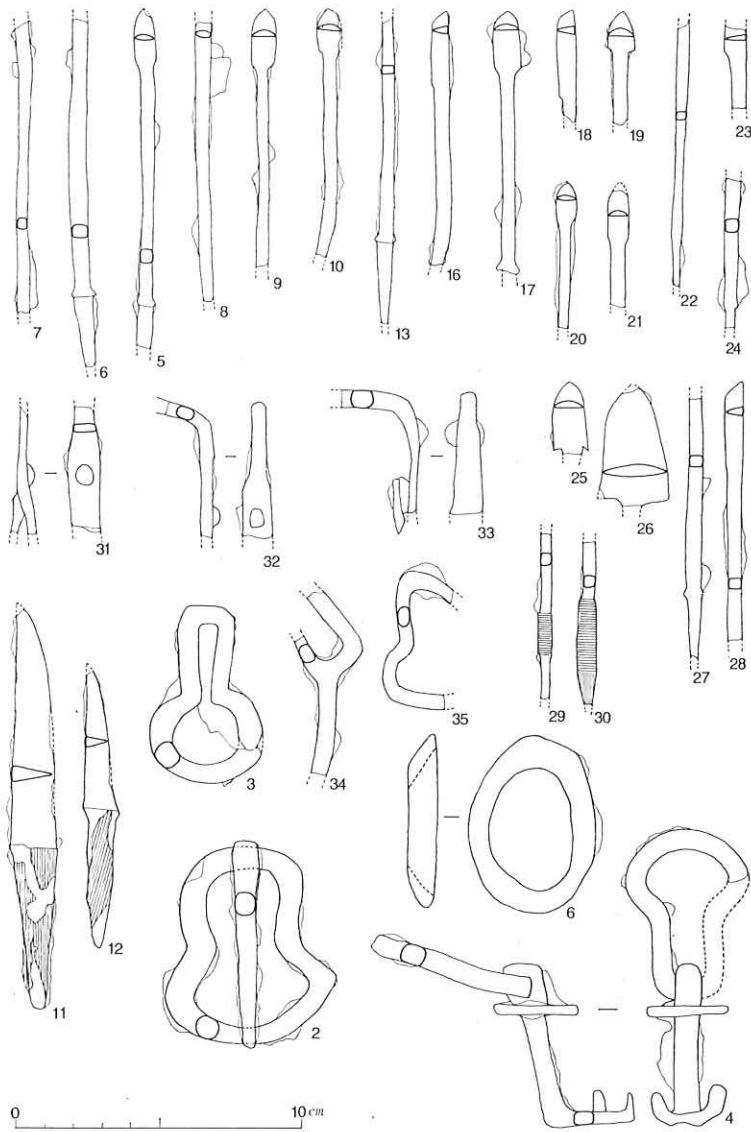
刀子は玄室より二本の出土があった。11は全長一四・一センチ、12は九・七センチある。いずれも茎に把木の銹着がある。

鉄鍬は五型式三一本が検出された。いずれも完形を示すものはない。五型式のうち平根鍬に属するものは二本で、他は尖根鍬である。

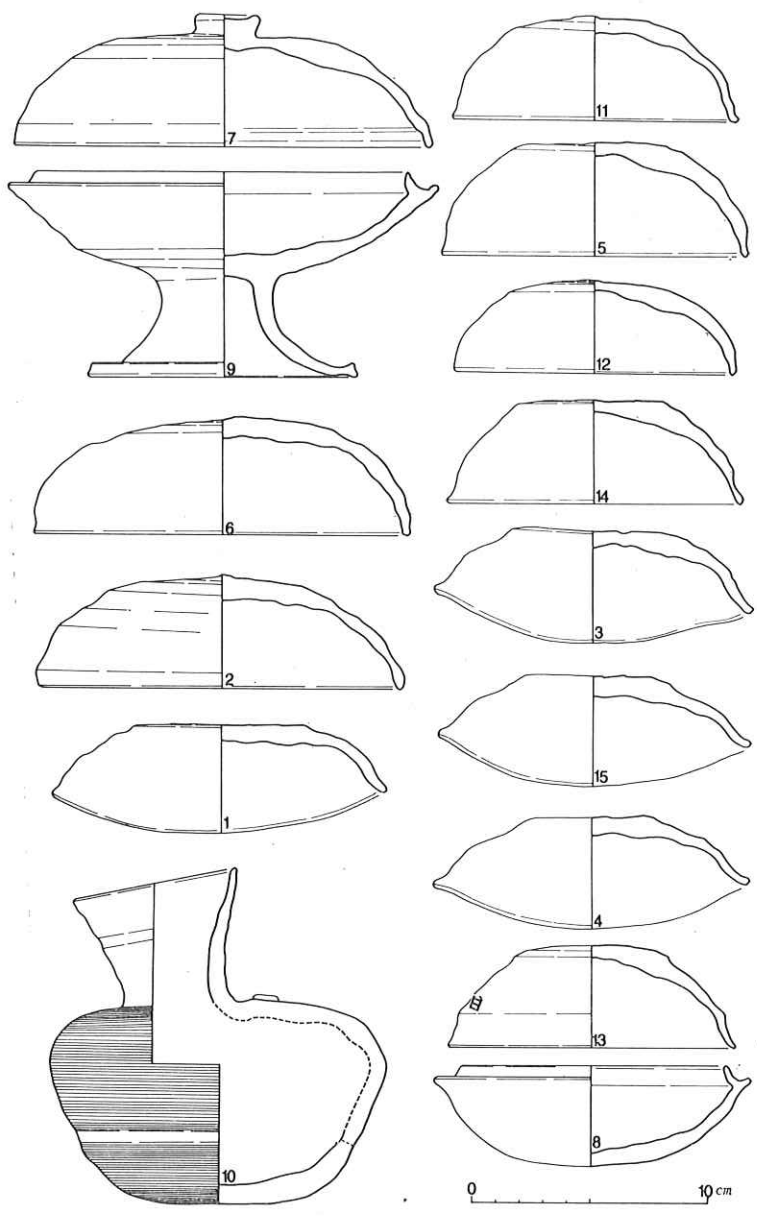
馬具は轡、壺鏡の鉸具頭が検出され、4はおそらく木製鞍の鞍金具と考えられるから、基本的な馬具のセット



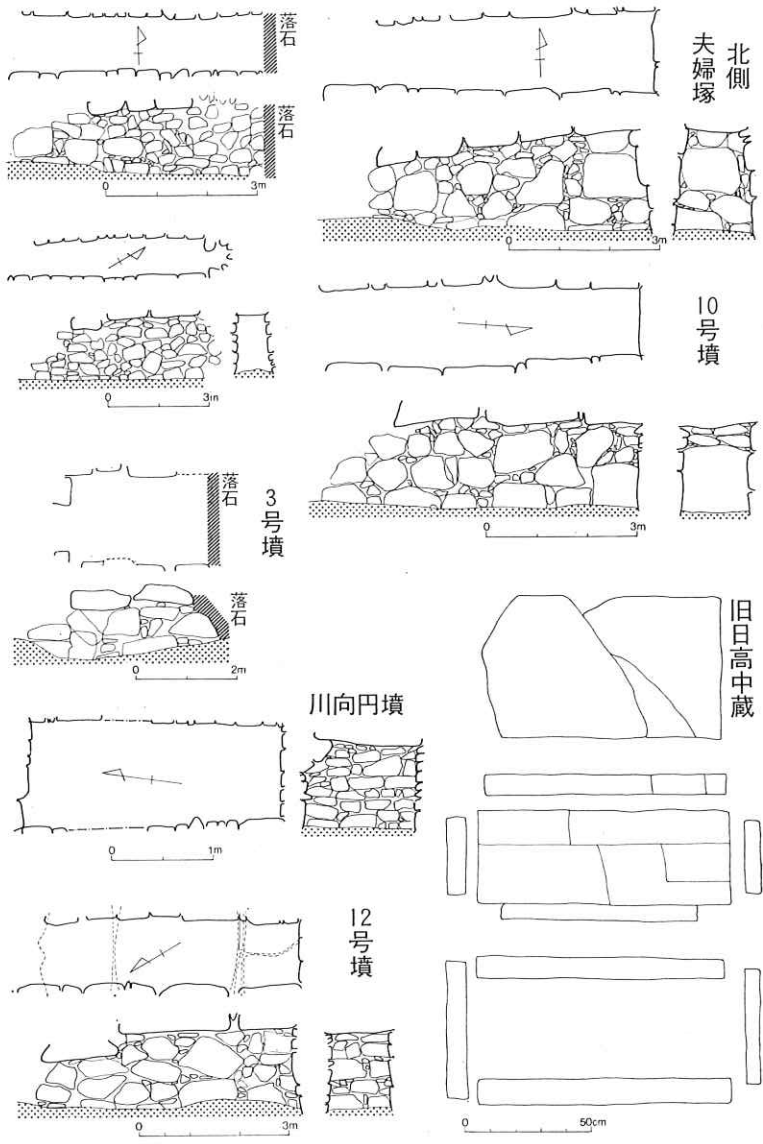
第90図 楯縫古墳出土土須恵器



第91図 栢縫古墳出土鉄製品



第92図 伝楯縫古墳群出土須恵器



第93図 栢縫古墳群内部構造図

はそろっている。しかし装飾性の乏しいものである。

装身具としてはわずかに金環が検出されたのみである。金環はいずれも銅芯<sup>どうしん</sup>金張りである。

本墳の築造時期は六世紀末と考えられ、後期群集墳における大形墳の一様相を示したものと考えられる。

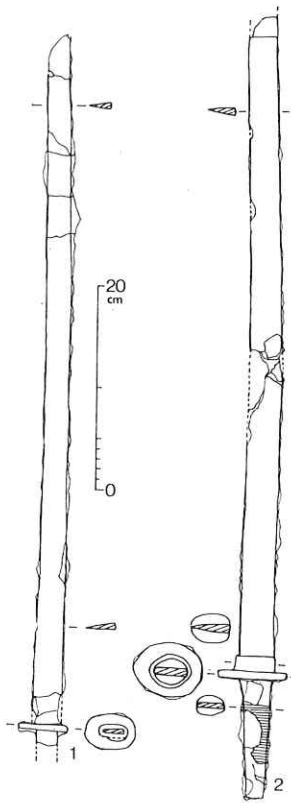
その他、現在保管されている第92図に示した須恵器などは、桶縫古墳出土と伝えられているが、その詳細は不明である。図化したものは坏蓋一、坏身一、有蓋高坏一、平瓶一個体であるが、他に金環等もかつては保管されていたといわれる。

須恵器は六世紀末葉から八世紀前半の年代を示している。坏蓋1・3・4・14・15は焼成の際の歪が顕著である。なお、桶縫古墳群の中には、第93図の石室の実測図によると、竪穴式石室などを埋葬主体とする古墳のあることを示している。

#### (6) シゲリ谷古墳群

シゲリ谷古墳群は、これまで

で南方のシゲリ谷古墳群と左鎌古墳群に分けて呼ばれていた。いま現地の状況や残されている遺物あるいは発掘記録によって、一応シゲリ谷古墳群と一括して呼ぶことにする。現地形からは南方の四基



第94図 桶縫古墳出土直刀

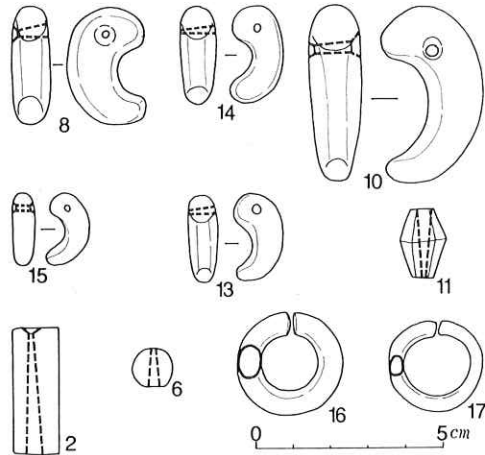
と、北方の一二基を分類できるが、北方の一二基については細分が困難であり、従来それらを左鎌とシゲリ谷古墳群に分けているからである。

本古墳群は大部分が横穴式石室で、その多くが開口している。いま図版66下に示した記録によると、日露戦争戦勝記念に四基の古墳を発掘している。発掘古墳の位置図があるが、正確に現地では対応できない。

記録によると明治三八年一月六日に発掘し、須恵器、金環、古鏡片、玉類などを得たことが知られる。いま玉類などが所蔵されているが、土器類については散逸したもののようである。石室の開口する二号墳は片袖式の石室で、玄室の長さ五・一〇メートル、幅一・五五メートル、高さ一・六六メートルある。左側壁の持送りがやや顕著である。

三・四号墳も相似た規模の横穴式石室で、五号墳の奥壁は円形状の割石を多く使っている。出土遺物は鏡一面、勾玉六個、管玉五個、丸玉二個、水晶切子玉二個、金環三個が残されている。第95図8の石材はメノウ、6・11が水晶、管玉はいずれも碧玉である。

銅鏡は破片となっているが、直径約四・八センチの珠文鏡である。内区には三個の珠文が残り、その外側に櫛歯文帯がめぐっている。各部の寸法は第5表の通りである。



第95図 シゲリ谷古墳群出土遺物

第6表 管玉計測表

項目 番号	長さ (cm)	幅(cm)	穿 孔
1	3.32	1.23	
2	3.06	1.14	片側
3	2.99	1.15	〃
4	2.91	1.16	〃
5	2.87	1.10	

第5表 鏡計測表

面 径	4.8 cm
面 厚	0.12
鈕 径	0.93
鈕 高	0.48
縁 厚	0.13
縁形式	平

勾玉は現在五個が残っているが、その石材の状況からみて、古墳出土品として疑問のあるものもみられる。第95図8は石材は良質でないメノウで、古墳出土品として疑いのないものである。長さ三・〇〇センチ、幅二・〇二センチある。片側から孔があげられている。14は黄色を呈し部分的に黒点の混じる色調で、よく磨かれている。片側から穿孔されているが、反対側に面取りは行われていない。10は薄黒色を呈している。孔は両側に面取りが行われている。

15は濃い緑色に黒および薄い緑の縞模様がある。面側に面取りがある。13はガラス質で紫色をしている。片側から孔があげられている。

二点の水晶製の切子玉がある。六面体にカットされ、孔は片側から穿孔されている。凶化していないもう一点も同様で、その寸法は長径一・八六センチ、短径一・二二センチある。

水晶製丸玉は二点ある。片側から孔をあげ、孔の部分はやや平坦になっている。他の一点は長さ九・九ミリ、幅八・八ミリある。

管玉は五点あって、いずれも濃緑色を呈する碧玉製である。2は最大のもので、片側から穿孔し、反対側に面取りを施す。他のものもわずかに大小があるが、ほぼ同様のものである。その寸法は上記の通りである。

金環は三点ある。17は細身で銅芯銀張り、16は鉄芯金張り、他の一点は銅芯金張りである。いずれも鉄・銅の棒を円形に曲げて、金・銀を鍍金したものである。凶化していない金環は長径二・九二センチ、短径二・七四センチある。



厚みは七・一ミリと六・七ミリあって楕円形を呈する。

#### (7) 訓原古墳群

訓原古墳は神鍋字坂七一番地に所在し、現在山林となっている。古墳は南に下降する尾根稜線上に、約一〇基の古墳が造られている。現状ではもつとも南の丘陵突端部にあった一号墳が土取りによって破壊されたが、他は残っている。いずれも封土は顕著でなく、規模も大きくない。

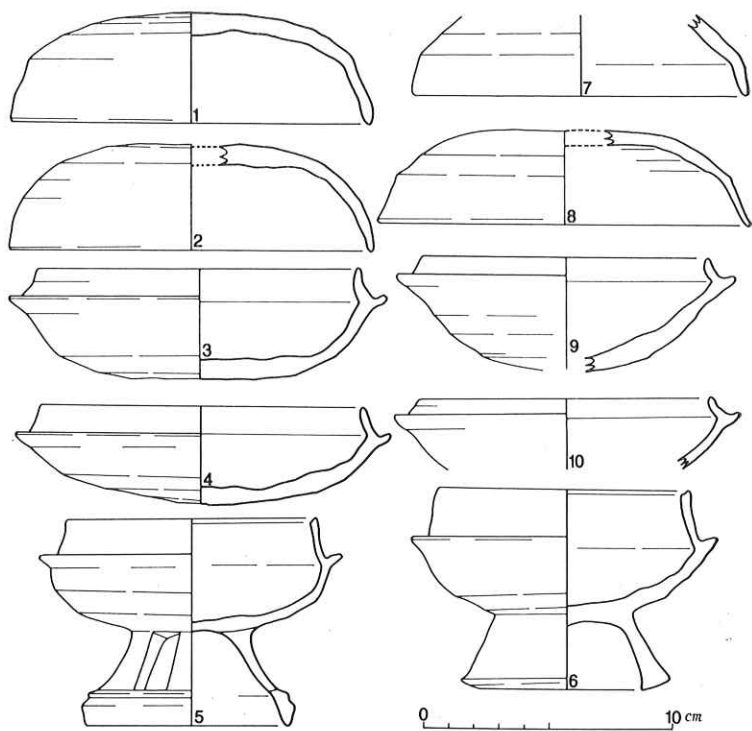
訓原古墳の丘陵突端部に近いものについては、次のような状況であったらしい。

丘陵最南端部において、昭和一六年頃稲架を作る際の掘削中に、須恵器二セットが出土し、古墳であると考えられて全山を調査の結果、最奥部の円形盛土の頂上部で、岩石の露出しているのを発見された。古墳の蓋石と推定して、昭和一七年春に発掘が行われ、堅穴式石室であることが判明した。この堅穴式石室は現在見ることができ、長さ三・二メートル、幅約一メートル、高さ約一メートルの規模を示している。石室内の出土遺物は南端部において、第96図1~4に示した二セットの坏が出土したのみであった。堅穴式石室を埋葬主体とする四号墳は、その出土の坏がほぼ六世紀後葉ころの年代を示している。また最南端部出土の高坏は六世紀中葉ころの時期で、このころから古墳の築造が開始され、継続して一〇基の古墳が営なまれたものと考えられる。

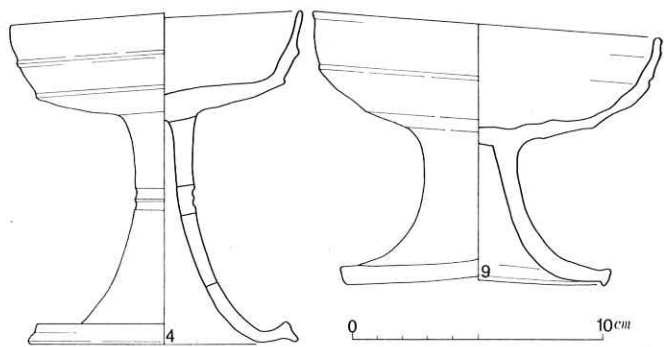
#### (8) 岩倉古墳群

栗栖野小字塚の本に位置する岩倉古墳群は、現在三〇基の円墳からなっている。古墳群は神鍋山南方の標高三五〇~三六〇メートルの、緩かな丘陵上に形成されている。昭和四九年に一八基の外形測量、および三号墳の石室実測が実施された。その外形規模は第7表の通りである。

本古墳群の分布状況は、その築造時期の詳細が不明なことから十分に形成過程を観察できない。1号~19号墳



第96図 訓原古墳群出土須恵器



第97図 町内出土の遺物

第7表 岩倉古墳群計測表

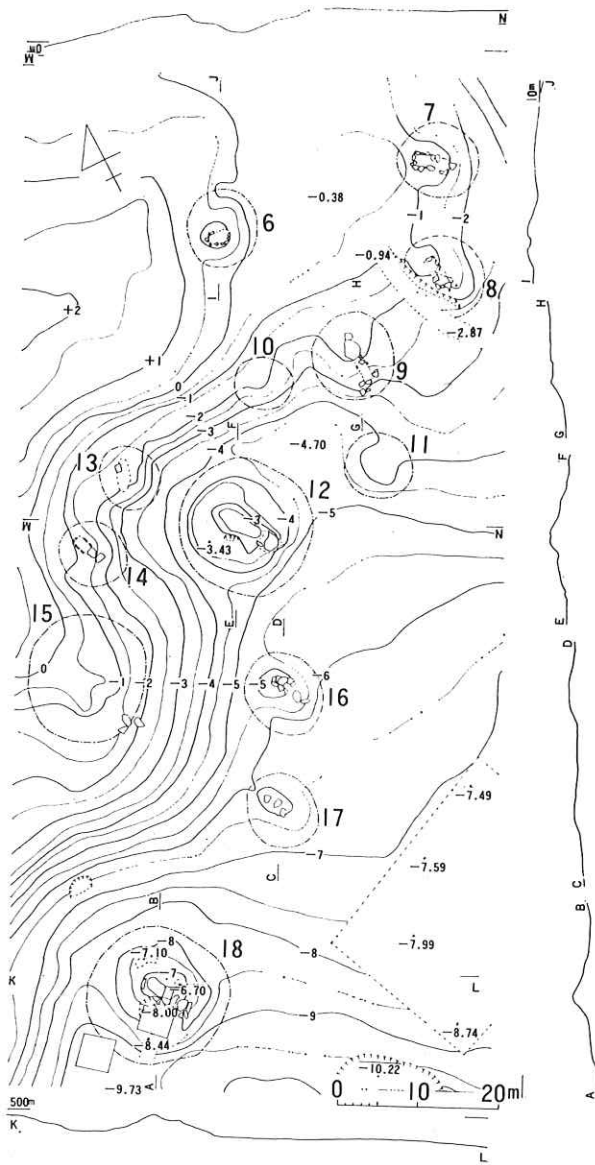
古墳番号	墳丘径(m)	内部主体	備考
1号墳	12	横穴式石室	石室実測
2 "	14	"	
3 "	15.2	"	
4 "	10	"	
5 "	12.5	"	
6 "	9.1	"	
7 "	9.8	"	
8 "	9.8	竪穴式石室	
9 "	10.3	横穴式石室	
10 "	7	"	
11 "	8.5	不明	
12 "	16.8	横穴式石室	
13 "	7	"	
14 "	7.8	"	
15 "	15.5	"	
16 "	9	不明	
17 "	8.5	"	
18 "	16.5	横穴式石室	

側にのみ袖を有する。神鍋山熔岩の多孔質安山岩を積んでいる。

玄室は長さ三・七メートル、幅二・四メートルの規模を示す。玄室側壁は五く六段の石積みを行い、上段にくらべて下段に表面の平らな割石を使っている。石の大きさは上・下段ともあまり差がない。奥壁は最下段に大形の石を二枚据えて、上段に小形の割石を積上げている。奥壁部の持送りはやや顕著である。羨道部側壁は四段の石積みを行う。右側壁玄門部は石を縦に使っている。持送りはほとんど見られない。天井石は玄室三枚が架構され、羨道部は二枚が残っている。石室内には排水溝、敷石は認められない。

はそれぞれ群中で最も規模の大きい3号・12号・18号墳を中核とする三つのグループに分けられる。北に位置するグループは五基、中央一二基、南のもの二基を数える。  
内部構造については、知られるもののうち、8号墳の竪穴式石室と推測されるものを除いて、いずれも横穴式石室を内蔵している。それらのうち3号・12号・15号・18号墳の石室が大形の規模を有するようである。

3号墳は本古墳群中、唯一の石室の実測が実施された古墳である。内部構造は羨道を南東に向けた全長九・三メートルの横穴式石室で、片



第98図 岩倉古墳群分布図

遺物出土状況は過去の乱掘りによって攪乱されているため、正確に埋葬時の位置をとどめていないが、三つの場所においてまとまった状況で検出された。一つは玄室右裾部から鏡・鉄鏃が出土し、玄門左側壁付近からは須恵器・高坏・鉄鏃、さらに美門付近で須恵器片が多数出土した。